

に飢餓、地獄化したものであった。こうした民間の日本人に更に危害を加えようとする米軍ではなかった。

むしろ、タバコやチューインガムを与える米軍もいた。

日本が敗戦したので強烈な怒りがおこらない、米軍の爆撃に対する憎しみが少しずつはぐれていくのを感じた。

戦局はげしい最中であっても、沈着にして理性を失わず、判断して行動できる、岡田梅子さんであった。

現に、鉛筆と用紙があれば、無限の自由天地にあまがけて楽しみを、文につづって老齢をみせない更なる新芽を生えさせている。

(出引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

生きる

熊本県 新美 彰

あの忌まわしい戦が終わって、もう一か月以上も

たっているだろうか、マニラにある捕虜収容所に送られる途中、堀割のある町を通った、水の豊富な堀割にかかった石橋の上で、長い黒髪を洗っている若い女が、こちらをジロリと眺めた目、それに金か、それとも真鍮かわからないが、大きなイヤリングが夕日にキラリと光った、その目もイヤリングも憎しみに燃え蔑んだ目だった。

お尻を持ち上げて、ソラノ、ボンハル、バヨンボンの町々を眺めたいと思ったが、あの彼女の目の一撃で腰をおとし、座り込んで小さくなった、彼女ら、原住民の方々の気持ちを思うと、さぞかし憎い日本人たちであろう。

憲兵隊の宿舎になっていた、バヨンボンのRamon B Balidoさんの家の何かを私はあの時盗んだ。それで憲兵隊の方々が困っておられると聞いて、ごめんなさい、とバルドウさんに謝りに行ったら、かえって子供を抱えて大変だろう、と御自分たちが食べておられた夕食を分けて下さった。私は床に上って、フィリップン式に指で口にはじき込む食事の仕方をしたので、御主人

が「お前はフィリピンではないか、山奥に行くより戦争がすむまでここにおりなさい」とおっしゃった。

どんな気持ちで言っただろうか。きっと私がフィリピン人で、この戦争に巻き込まれた、かわいそうな女だと思ふ気持ちからかも知れない。でも私は日本人だ、日本にはいつか神風が吹いて、必ず戦争には勝つと昔から伝えられている。勝つまでは軍人さんと一緒に山に籠ろう、と思つてバルドウさんの言葉に従わなかつた。

バルドウさんのお誘いを受けてバヨンボンに残つたら、順子は亡くさずに済んだかも知からない。

フィリピンの人たちは、本当はみな気のいいあつたかい人たちなのだ。

あのアシン河のつり橋で、こんな恐ろしい橋を渡るのか、と考え込んで座っている時、一人の若い原住民がバナナを四本持ってきて食えと差し出された。私はうれしかった。猿がバナナを引きさらうようにして

取って皮をはぎ、礼を言わずにかぶりついた。

順子は骨に皮がかぶっている手を差し出して、自分

も欲しいと言っている。口移しにしてやった。そしてやつとありがとうと言つた。

フィリピンの方と戦争しているのではない、言葉が分かるならお話がしたいと思つた。いろんなことを思い出しているところに、顔をかすめて、何か飛んできた、石だ。

バカヤロー、インバイ、と数人の怒りにみちた言葉に現実には引き戻された。

それと同時に「座わんなさい」「立っているから石が飛んでくる、見えないように座わんなさい」「みんな、ここでは世話になつたところだから、見たいヨ」と日本女性の泣き声にまじつての悲しい叫び声。

もうバヨンボンは遠くにはなれてゐる。サンホセから汽車にのせられたが、これも無蓋車、ひと貨車に三十人くらいの女性に二人の米兵が、前後に銃を持って立っている。私たちを見張るのではなく、私たちを住民から守ってくれているのだらう。

しかし、なぜか汽車は止まって動かなくなつた、汽車を見て集まつた付近の住民たちの中から、男性が一

人、貨車にかけ登って、指をさし、「あの女を自分にくれないか」と米兵に言っているそうだ。米兵は下に降りろ、と銃でこずいているが、米兵の顔は笑っている。情けない、これも戦争に負けたのだから仕方ないことだろうが、本当に腹が立つ、女たちは恨みの目で、身を縮ませて見つめた。

さいわい、汽車も動き出したので皆ホツとした。懐かしいマニラの香り、椰子油でんにくを炒める時のあの香りがしてきた。見たいが皆立ち上がることが出来ず、空を見上げた。

なんときれいな空だろう、あのキャンガンの山奥で、こんなきれいな空見たろうか、いや毎日毎日の雨で色なんか考えもしなかった。すべて灰色の世界のようだった。

でも私には一つの色が思い出された。

それは幅三十センチくらいの山道、右側はたんぼ、左は上段のたんぼ、というところで、子供を連れ来た原住民が向こうから来た、私たち女性はその人を通すために、草のある上段のたんぼの土手に身を寄せた。

遠くから遠慮しいしい通っていた原住民が私のところに来た時、その股間にある、日本でいうへこの色の鮮かな美しさ、思わず後向きになった、彼のへこの房を握った、とたんに私の後から来ておられた、近藤タツミ小母さんが、私の手をピシッと叩き、「それを女が握ったら、あなたの嫁さんになるといふことだ」と叱られた。

私は驚いて手を引っ込めた。今私は原住民のお嫁さんになることは出来ない、がなんときれいな色彩で織ったものだろうか、その上を刺繍してあったようだ、昔、平安時代の日本の男性の服装に平緒というのが、あのへこのようにきれいなものだったと、博物館で見たことがある。

原住民の男は笑って子供と去って行った。

今腹に入れるものは、あるだろうか、食うものはないかと探す状態の時、あのへこの色にまどわされた、自分が不思議に思える。

色といえば、カンルバン捕虜收容所の門に入ったとたん、頭から白い粉を全身ふりかけられた。DDTと

はその時は知らず、何かの薬とは思ったが、これで目がつぶれた、のどが痛くなった、という者はおらんかったようだが、驚いたことに、薄くぬけた頭の髪の毛を一本一本指先までしごとくと、なんとゴマのようにシラミの卵が取れてきた。鏡もないので自分の頭にこんなたくさんのシラミがついているのは知らなかった。これが何もすることのない、女たちの捕虜収容所の中の一日の仕事になった。

兵隊さんたちは、私たち女性のテントの掃除に来られる、私たち女がしますからよいですよと言っても、米軍の命令だからとおっしゃる。

女性たちの着物はそのまま、持ちものも没収されず、DDTをふりかけられたのだが、男性は来ていたものは全て脱がされ、持ちものはみな焼かれ、PWのマークをつけたシャツとズボンを着ておられたが、だんだんズボンだけの人になり、ある日からバスタオルを腰に巻いた兵隊さんが掃除に来られるようになった。驚いた女たちは服はないのですかと言ったら、捕虜になつて入ってくる者が多くて服がないから、タオルで

我慢せいということですが、とのこと

女たちは、アメリカ軍は何と想ってこんなことをするのだろうか、せめてズボンだけでも履いた人たちを掃除にやって下さったらと、おるにおられず、テントを出て診察室に行ったり、シャワーのテントに行ったりした。

暑いところのシャワーはとてもありがたい。シャワー室の裏側の鉄条網を越して眺めると働いておられる男性たちの姿が見られる。

何気なく眺めていたら、百五十メートルくらい先にトラックが来た。荷台の運転寄りの方がグーッと持ち上げられたら、筒のようなものがドドゥッと下に落とされた。なんだろうか、何かいらぬものを埋めるのだろうかと思って、自分のテントのキャンバスベッドの居場所に戻った。

その夜は捕虜収容所内での慰安会で舞台も出来ており、驚いたことにきれいな日本の着物を来ておられ、見違えるようにお化粧をされた方が「九段の母」を踊っておられる。

山の中にまで持って逃げられた着物だろうか、帯だ
ろうか、いや、そんな荷物を持てるはずはない、始め
の慰安会の時は、あんな着物は来ておられなかった。
米兵がどこからか持ってきたのだろう。

でも踊っておられる方の腰、手が素人とは思えない
お上手だ、聞いたら料亭広松の芸者さんだそうだ。

あちら、こちらからすすり泣きの声がしてきた、な
んて悲しい歌だろうか

母を思い出した、母はこの歌を聞いても、一あや子
は女だから、戦争にはかたらんけん、なあに、無事で
生きとる」と思っているだろう、早く母に会いたい、
母さんも妹も無事であって欲しい。

翌日、昨日見たトラックから落とされるものが気に
なって、シャワーを使うより先に鉄条網から目をこら
して見ると、昨日埋められたところにたくさん白い
棒が立っている。確かにあの方向だったのに、様子が
変わっている。

又あとで来てみよう、今日は診察日だ。

診察に来るたびに熱を計られると、七度三分、五分

と微熱がある、アメリカの軍医から日本に帰ったら、
必ず内科の診察を受けるようにと注意がある。

午後から又今朝来たところを眺めたらたくさんの日
本人捕虜らしい人が働いておられる。あー、トラック
が来た、何か落とし始めた。その中の一つから、足だ、
確かに足だ、人間の足が宙に突き出た、遠いが私の目
は見た。

足だ。終戦も迎え捕虜収容所に入れられ、もうひと
息で日本の地をふみ、家族とも会えるというのに、亡
くなられた方たちを埋葬されておられたのだ、それな
ら今朝見て、なんだろうと思ったのは白い墓標だっ
たのだ。

この事に関して帰国後、金貨ルリヤスに勤務してお
られた、広瀬四郎さんに聞いた。

「毎日、毎日、折角捕虜収容所まで帰って来ておら
れながら死んで行かれる、その方たちをきれて包み
ロープで結んで、トラックに乗せる仕事を自分化した
が、顔の写るようなおかゆばかりで結んだつもりが、
とけてしまったのだろうか、もっとしっっかり結べばよ

かったが、その力が自分にはなかった」と。

二人でその時を思い合掌した。

今日は面会日だというので、女たちは朝早くから、

シャワー室は満員、若いお嬢さんが持つておられた口紅があちら、こちら、と女たちの唇を色づけてゆく。

マニラ防衛で戦った男性が三人だけ生き残っている
と風が便りを持ってきてくれた。

ひょっとしたら、うちの主人も元気で捕虜になって
おられ、今日面会に来て下さるかもわからない、と門
の鉄条網に来たら皆思いは同じの女たちが待っている。
米兵の引率でやっと日本人捕虜の男性がやって来た。

子供たちが「来た、来た」と歓声をあげる。女たちは
私の旦那は、知り人はと心配と喜びで鉄条網にかけ寄
る。

たった一人の私たちの子供、順子をあの山中で餓死
させた、私は主人と会ってもなんと言ったらよいか、
行き帰り四度も眺めたが、私の主人はおられない、も
う帰ろうとしたら、新美の奥さんと呼ばれたのでふり
帰ったら、金貨メリヤスの伊藤四郎さん、丸々と肥え

ておられるので、わあー元気で良かったですネ、いつ
投降されたのですかと聞いたら、六月に捕虜になった
とのこと。

うちの主人も、意地を張らずに早く投降すれば良い
のに、無事に御主人に会われて喜んでおられる御夫婦
がたくさんおられるのに、お父さんの顔をみて歓声あ
げて喜んでいる子供、しかし間の鉄条網が邪魔になる、
鉄条網を取りはずしてやるような優しい気持ちにアメ
リカ兵はなれないものだろうか。

やっと待ちに待った日本に帰れる船に乗せてもらえ
ることになった。

港にたった一隻の日の丸を掲げた軍艦に乗るとのこ
と、どうみても艦も小さいがあの日丸は楕円形に見
える、戦争に負けたので遠慮して赤のまん丸を楕円に
されたのだろうと真剣に考えた。

久し振りに見る日の丸だから涙で目が狂ったのだろ
う。

海防艦一一八号に乗る、小さくても日本人ばかりで
ホッとする。マニラ湾には星条旗をひるがえした米軍

艦が、何隻もはいつている。それを見ると肩身のせまい思いがする。

コレヒドール島には人影もみえない、死んだような島だが、これから平和な島になるだろう、いつの日にかこの平和になった島をたずねて、果物をたくさんつかった大きなアイスクリームを食べたい、そして結婚前に一人でこっそり行ったハイヤライに、もう一度行ってあの雰囲気味わってみたい。

空からの空襲、海の底からの魚雷の心配も無し、しかし風速二十メートルの風で小さな軍艦はゆれにゆれて気分の悪くならない者はおらなかった。

やっと夕暮れの鹿兒島湾に入り、懐しい日本の街をみる事が出来たが、ここには人が住んでいるのだろうか、しんと静まりかえっている、やっと日本の地が踏めるのに迎えてくれる人がおられるのだろうか。

オート三輪が心細いライトをつけて、トコトコ通りすぎて行くのが見えた、ああやっと人間が生きておられる、生活しておられると安心したが、なんと寂しい町だろうか。

翌朝、赤い実をつけた柿の木があり、障子の見える家のある、加治木の港に上陸して、お金日本円で千円とお米五合くらい頂戴した、そのおこめを御飯にして早く食いたいために、近所のお百姓さんの家に入り込み、米を炊いてもらった、お礼にお役人さんからもらったばかりの千円の値打ちがわからず、千円そっくり差し上げたので大根漬を五切くらい頂戴した。

おにぎりの香りと大根漬に負けて、庭先の石に腰を下ろしばくついで、ああ日本だと思った。

熊本に帰りついたのは、昭和二十年十二月一日だった。夕方、熊本市内を中心に焼け野原になっている、母の住んでいた白川ベリの家も焼けて、「障子、出町の家に来い」と立札がぼつんと立っている、母の心尽くしがうれしい。

小さな隠居家の六畳一間に母と妹が、荷物も無く、着たきりでふとんひと重ねの姿で生活していた。

「よう帰った」と母、「姉ちゃん死んでよかった」と妹。

あとは涙で手を取り合って泣いた。

「母さんトーフを売っているならトーフを食いたい」と言ったら、妹が二丁のトーフを買ってきたのを、湯通しもせず一丁半、たいらげてしまつて、ああ日本に帰ってきたと思つた。

食うものも思うようにならないし、買えない、との話にこれからどうするか、働くにしてもこの妊娠十か月くらいに、ふくれ上つたおなかを直さないと働くことも出来ない。

たったひと重ねのふとんに、母と妹が向こう側にやすみ、母たちの足元に私が入り込み、これからどうするか、と考えていたら母が私の足を撫でて、「足が象の足のようにならざらして、足指がお猿さんのように広がっている、どうしてだろうか」と言うので、フィリップスの山奥まで逃げて、山道に置いてある石を、ちゃんとかまえないと谷に落ちるのでお猿さんの足のようになつてしまつたたい」と言ったら、又母が遠慮がちに「弘喜さんと一緒に山の中を逃げたのか」と聞くので、「いや弘喜は十九年の九月に召集されたので、順子と二人で山に逃げた」と言ったら、「あんだ、

弘喜さんに申し開きのできんコッぱしとつとではなかりうナ、妊娠しているようだが」と怒つた声で言うので、やはり心配していた母に、「母さん、食うものも食つていないから。栄養失調になつて、腹が膨れたつタイ、終戦が一週間遅かつたら、死ぬところだった、明日、木戸先生に診てもらつて一日も早くこれを治さないと働けないから、母さん心配せんで」と言つた。母は驚いた顔をしていたが、何もあとは言わなかつた。

母の顔をみていたら、この昭和十八年から昭和二十一年十二月までのことを書いておこう。という気になつて、母さんお金少し貸して、明日の診察代と、原稿用紙とペンを買いたいから、とねだつた。

翌朝、子供のころからのかかりつけの木戸先生のとこに行つた。

お腹の膨れを直すのは、三度の食事を一日にお茶碗一杯のごはんを四度にして、晒一反で腹を強く巻いてごらん、と言われても晒一反買う金はないので、闇市に売つていた兵隊さんのゲートルを二人分買ってきて

腹に巻いた。

カンルバンの捕虜収容所で、アメリカの軍医が、日本に帰ったら胸の方を診察してもらいなさいと言われたがと言ったら、「微熱があるようだが、うまいもの食ってゆっくり静養しなさい、生活が元に戻れば良くなる。薬もあげるから、気を案にしてゆっくり養生しなさい」とおっしゃった。

私は元の体に戻さないと生活出来ない。木戸先生のおっしゃる通りに、うまいもの食ってゆっくり静養するなど出来ない。なんとかお金が欲しい、棚からぼた餅は落ちてこない、考えついたことは、汽車が通らない時、鉄道線路に落ちている石炭を拾って、それを売って食うものを買うことだ、しかしその金もトーフとおからを買うだけにしかならない。

膨れ上がった腹は元に戻ってくれない、そのうち人のすずめで、手製の石鹼を売る行商を始めた。個人で作っておられる石鹼で水っぽい品物だが、よく売れたが昨日仕入れた売れ残りの石鹼は水分がなくなつて、小さくなっている。今日仕入れたのは売れるが小さい

と残る。その小さいのが大きいのより、どんなに汚水を落すか、成分の違いまで口から出まかせて話して残らないようにしないと、狭い六畳の部屋は使いもしない石鹼の山となる。

今、私の頭の中の記録簿では、誰から、どこから、伝えられたのかはつきりしないが、山陰の方に引揚げた方が、新しい魚を一度にたくさん食って死亡されたから、注意するようにと連絡があった。

「母さん、うちは貧乏でよかったナ、毎日栄養のあるのはトーフとおからばかりだもんなあ、でも騙でんよか、新しかつば刺身で食いたいなあ」と言ったら、母は黙って横をむいた。

昭和二十年十月五日から十五日までの間に、約五千人の米駐留軍が熊本に入つて来た。当時、私の結婚の仲人をされた、県会議員の大塚様に、ダンスホールと駐留軍専用の病院を作れと命令が出たそうで、甲佐町から桜材を採りダンスホールの床板にし、音楽の好きな青年たちを集めて、バンドを作らせた。十二月のクリスマス前に開店するから、踊れなくてもよい一晚い

るだけで二百円あげるから来なさい。と言って下さったが、この妊娠十か月の腹の膨れではとても駄目ですとおことわりした。一晚二百円と生バンドは私をひきつけたが、自分の体力を考えるとダンサーは無理と思いい、石鹸、お菓子の行商、食堂の皿洗い、腹が少し品良くなったので料亭の仲居さんもやった。

微熱も出なくなり、スタイルもまあまあになったので、昭和二十三年、クリスマス前に椅子に腰をおろしているだけで二百円、それに生音楽の魅力にひかれて、大塚様をお願いしてダンサーになった。もうそのころは引揚者の方々がたくさんダンサーになって、米兵の相手をしておられる。

ダンサーでない時の話は、まだ帰って来ない主人のこと、戦争で苦しかったこと、子供にあげる食事のこと、本当によいお母さんばかりだ。戦前の上海の話をして下さる奥さまは、きつとすばらしい生活をしておられたのだろう。広い満州のお話をして下さる方は、髪にチラチラ白毛が見えるが、男に勝る仕事をしておられたのだろう。

なんで戦争など始めたのだろうか、私は一晚二百円の金につられて、ダンサーになったが、これがだんだん嫌気がさしてきた。

ダンサー商売が終わると、帰りに横丁の路地の屋台でコップ一杯の焼酎を飲むようになった。元酒屋をやっていた母は、焼酎飲むのをやめなさい、ダンサーをやめなさい、と口やかましく言うようになった。

主人の後輩で熊本県庁に勤めておられ、マニラでは金貨メリヤスの社員だった広瀬四郎さんが、ダンサーはおやめ、あなたなら適任と思うから、と駐留米軍の家具修理工場の事務の話を持って来られた。

これもアメリカ兵の顔を毎日見なくてはならない仕事か、と思い英語は書くのもお話も出来ないから駄目です。といったんはおことわりした。

福岡の会社もあなたのことを調査して是非にと言っているから、一か月やってみて駄目なら、やめてよいから、自分も県庁におるから、なんでもこまいったことがあったら、電話して下さいすぐ来ます。ダンサーで焼酎飲んだくれておられると、新美さんが帰って来ら

れた時、私はなんと言いますかと論された。

熊本城に登る御幸坂の下に、赤れんがの四棟の日本軍の兵器庫がある。その兵器庫は米軍が入ってから、米軍家族の家具用品置場になり、その横にかまぼこ形の兵舎の大きいのを二棟、家具修理の小型修理場にし、赤れんがの一棟の一部を、私の事務机と、大型ソファアの修理場にした。

家具の名前を覚えるのも英語だし、書くのも横文字だから大変だが、家具修理の値段を決めるのは、最初福岡の本社から来られて教えて下さったが、あとは私に一任された。責任のある仕事だ。

一か月など風のように飛んで行った。

米軍の事務所のキャブテンは、女だからと容赦してくれない。修理の仕方が悪いと始めからやり直し、私は職人につらくあたる。すると職人は、休憩だと勝手に門外に出て行く。仕事がだんだん面白くなっているところだから、職人に負けるもんか、帰ってきたら私は猫になろうと思った。

福岡の本社から、明日福岡にある調達庁に行つて下

さい、聞きたいことがあるといつておられますから、とのことで翌日、福岡にある調達庁に行つた。問題はベニヤ板の使い方が多いからその説明をしてくれ、とのこと。

「直径一メートルの丸テーブルの広さを出すのは半径×半径×3.14で広さを出しますが、私は直径一メートルなら一メートルの正方形で広さを出しております。そして直径一メートルの円を切ります。残りのすみのベニヤ板は使用出来ないので捨てます。それを使えとおっしゃるなら、どうぞ作ったものを見せて下さい。」ととうとうとやったら帰つてよいと言われ、帰ろうとしたら、私の後で聞かれておられた小父さんが、ちょっと待っていて下さい。とおっしゃった。

その小父さんは福岡の鉄工所の御主人で、私のように、鉄板を十字型に切つたものを納入したら、鉄板の使い方が多いと文句が出たが、あなたがベニヤ板の話をして下さったので、私は簡単に済みました。昼食を御一緒にどうぞとおっしゃった。

家具修理だけで無く、ある日連隊長から本部に来て

欲しいとジープが迎えに来た。何事だろうと、連隊長の部屋に入ったら、倉庫がどうしても開かないから、なんとかしてくれ、とのこと、急ぎジープで金庫製造元に行き金庫開けの名人を連れて行き、十分もせず金庫が開いた。気のよい連隊長から、名人も私も大好きなチョコレートとコーヒーを御馳走になり、私は欲しいと思っていた大きな桜板のパレットを頂戴した。私が油絵を習っているのを聞かれて下さったのだそうだ。

仕事にもなれて、仕事上の親方として女でも認めてくれ、対等につきあってくれるアメリカ人、それに反して「よくジープに乗ってアメリカ兵の運転手と笑いながら話しているあや子は、街の女になったのではないか」と母に陰口を言いに来た親戚の者もいる。

そんな時、突然何代目かの連隊長が、私の机の前に立って、椅子に張っている布地が自分の言う布地と違うと言い出した。

私は張る布地の番号に、連隊長の署名、キャプテンの署名、サージャン、私の署名の書類を見せて、間違いないと主張しても、張る布地を変更せよと言う、も

うすでに三十ヤードの布地は裁断している。私は引下るわけにはいかなないので外で話そうと屋外に出て言い合いになった。私はその時戦争に負けても、私は負けないゾと思ったので、熊本城に登る坂の下につかつかた行って、

「みんな聞いてはいヨ、アメリカ人は戦争に勝っても、承知の署名ばしとって無理を通そうとする。ひどいですヨ」と大声をあげ泣き出した。坂道を通っていた日本人は驚いて立ち止まって私を見た。

連隊長は私がこんなことをするとは思われなかったのか、慌ててジープで帰られた。

生活も安定し、油絵の勉強も石膏デッサンから、裸婦デッサンになった。この世の中にこんなきれいなものがあるか、と早鐘のように心臓がドキドキしてデッサンどころかジープと眺めるばかりから、やっとスケッチブックに描けるようになった。そのころから中央展に出品出来るようになった。

絵のために彫刻の勉強を始めた、木を握ってみると、順子を彫ってみたくなった。やせて骨に皮をかぶった

順子でなく、写真一枚無いから自分の思うようなかわいい順子が出る。

それから、フィリップ山中でなんの楽しみを知らず、餓死していった子供たちを思って「飛んで日本に帰りなさい」という小さな木彫りの作品二つが出来た。

お観音さまも作った。戦ったお父さん、戦死した孫を思うおばあさん、銃後を守ったお母さん、も制作した。

美術展に出品するようになってから、油ネンドで造り、石膏取りをするようになったころは、もう体力は元に戻りすっかり健康体になった。

等身大の二人群像で「フィリップ山中のお祭」を制作した。熊本美術館で出品展示された時、丁度バギオ大学の副学長のレイナルド・C・パウチスターさんが来館されていたが、会場の作品をごらんになり、二人の老人の楽しい姿を表現して下さってありがとうございます、とおっしゃって下さった。

この作品はその前年、戦争を知らないカメラマンと二人で、北部ルソンから、マヨン山麓まで十六日間、

戦跡をたずねた時、クリスマスの前夜、ラガウエで木をくりぬいて作った手製の太鼓を叩いて、ダンスをしておられた老人二人を等身大に制作して賞をもらったものだ。

一九八〇年には、等身大で四人群像で題は「母さん立ち上がって」というもので、どこからの注文でもなく、ただあのフィリップ戦場を形にしたいと思って制作したのだが、助手も無く一人で頑張ったが、これも賞を頂戴して熊本美術会の会員になった。

作品は読売新聞大阪本社に差し上げたのは四人群像の前面の母と子で、後のイゴロツト青年がだっこしている日本の子供の立像は、置くところがないので、阿蘇町の狂竹庵の裏庭に置いた。その崩れかかった作品を、佐世保の釜墓地に是非置いてもらえないだろうか、と言いつたのは、釜墓地護持会の特別会員であり、佐世保で月刊紙「虹」を発行しておられる九州公論社の女社長、河口雅子様である。

立像の二人群像だけでは意味をなさないので、大阪読売新聞社に、そういうことで釜墓地に差し上げたい

から、「母さん立ち上がった」の二人群像を返していただけないか、と御相談したら気持ちよく返して下さったので、立像の壊れたのを修復して差し上げた。外にも二人群像の「神さま助けて」も差し上げた。出来れば四人群像だけでも、ブロンズにされて釜墓地に安置して下さいと願っております。

釜墓地のこと、御存知かもわかりませんが、やっとの思いで、捕虜収容所までたどりつかれ、日本に帰る日も近いというのに、病院で亡くなられた方々、お名前もはつきりと分かっておられる、四千五百人の遺体が昭和二十四年一月、米軍の命令によってフィリピンのマニラから、引揚船「ぼごだ丸」で送られてきたのを、佐世保の方々が、露天に薪を組んで御遺体をのせ、その上に薪をのせ油をかけ、一日に百六十体ずつ荼毘にされ、およそ一か月かかったそうで、結局遺骨は遺族に帰らず、現在はここで毎年慰霊祭があります。私も毎年出席致しております。

十五年前から、彫刻を「日本の海の音が聞こえる」という同じ題で制作し、熊本県美術展に出品しております。

ます。戦争を知らない若い方たちに戦争とはなんだ、愛とはなんだを考えてもらいたいと思ひまして……

フィリピンには、許すことはできてもわすれることはできない。という諺があり、日本には、のどもと過ぎれば熱さわすれるという諺があります。この二つの諺はほんとうに考えさせられます。

【執筆者の横顔】

新美さんは、開田文化学院にいたころのある日、フィリピンのマニラ日本人居留民会の課長が帰国されていたが、国学院を訪ねてこられたの話によると、「フィリピン女子に日本文字のタイプライターを教えたり、講演開催のときは速記する、こうしたことをできる人を探していただきたい」との願いがあった。処遇は赴任旅費はもちろん、宿舍も配慮する。毎月の給与は、百五十円、と聞いた。

新美さんは、もとより外地外国発展への志向型だったので、機会を窺っていた気持ちがあったのと、探せばおられるかも知れないが、いろいろと条件もでてく

るし、責任もでてくるし、これは当然であるところから、即座に、「私が行きます」と返事した。

この会話で返事したことで、新美さんの人生が運命づけられてゆく。

新美さんは二十六歳で三十円の報酬で何不自由なく働いていた時である。

母を始めどなたもマニラ行きは反対であり、賛成してくる人はいなかった。

一度、決意した新美さんはマニラ行きをあきらめることはできない。母に対して毎月五十円を送金する。

現在の日本は男女とも力の限り奉仕せねばならない。やがて母を南国のマニラに呼び寄せて楽しんでもらう。

こうした夢を描いて母を口説いたところ、母はようやく承諾してくれた。

まことに話はロマンでもある。

しかるに何ぞ、外地のマニラ生活二年六か月を顧みれば、マニラに上陸して勤務していた一年有餘は、南国の陸地に、青空にきらめく海洋の美麗な天国に住むがごとき平和な大地だったが、やがて戦乱の真只中で

生きる姿に変貌していくのである。

空から敵機来襲して機銃掃射、海洋から艦砲射撃、陸地のどこからでも弾丸が飛んでくる。現地のフィリピン人が暴動化する。逃げ場を失って死人がごろごろ転がる。死んだ母親に群がる子供たちの泣く姿、全く地獄のさたである。

こんな騒乱から生きのびてこれたのは、新美さんの機転のきく独特の知恵が働くからであろう。

(世引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助